

明石の姫君の入内

光源氏は、六条院を完成させ、「みやび」の粹を尽くしたいという念願を果たした。六条院は紫の上をはじめ、六条御息所の娘である秋好中宮（先の斎宮で冷泉帝の后）、明石の君などにそれぞれ四季の町（御殿）を配した壮大な邸宅であったが、そうした晴れやかな世界は、同じ邸内ながら娘には会えなかった明石の君の悲しみといったものに支えられる世界でもあった。

光源氏三十九歳の夏、十一歳になった明石の姫君が春宮女御として入内することになった。

御参りの儀式、人の目驚くばかりのことはせじと思しつつめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。かぎりもなくかしづき据ゑ奉り給ひて、上はまことにあはれにうつくしと思ひ聞こえ給ふにつけても、人に譲るまじう、まことにかかることもあらましかばと思す。おとども宰相の君も、ただこのこと一つをなむ、飽かぬことかなと思しける。三日過ぎしてぞ、上はまかでさせ給ふ。

たちかはりて参り給ふ夜、御対面あり。「かくおとなび給ふけぢめになむ、年月のほども知られ侍れば、うとうとしき隔ては残るまじくや。」となつかしうのたまひて、物語などし給ふ。これもうちとけぬるはじめなめり。ものなどうち言ひたる気配など、むべこそはとめざましう見給ふ。またいと気高う盛りなる御気色を、かたみにめでたしと見て、そこの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まり給ひけるも、いと理と思ひ知らるるに、かうまで立ち並び聞こゆる契りおろかなりやはと思ふものから、出で給ふ儀式のいとことによそほしく、御輦車など許され給ひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひ比ぶるに、さすがなる身のほどなり。

いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見奉るにも、涙のみとどまらぬは、ひとつものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。思ふさまにかしづき聞こえて、心及ばぬこと、はた、をさをさなき人のらうらうじさなれば、おほかたの寄せおぼえよりはじめ、なべてならぬ御ありさま容貌なるに、宮も、若き御心地に、いと心ことに思ひ聞こえ給へり。いどみ給へる御方々の人などは、この母君のかくてさぶらひ給ふを、疵に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。いかめしう、並びなきことは、さらにも言はず、心にくく由ある御気配を、はかなきことにつけても、あらまほしうもてなし聞こえ給へれば、殿上人なども、めづらしきいどみ所にて、とりどりに、さぶらふ人々も、心かけたる女房の用意ありさまさへ、いみじくととのへなし給へり。

上もさるべき折ふしには参り給ふ。御仲らひあらまほしううちとけゆくに、さりとてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなし、はた、つゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま心ばへなり。

おとども、長からずのみ思さるる御世のこなたにと思しつる御参り、かひあるさまに見奉りなし給ひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まり給ひぬれば、御心落ち居果て給ひて、今は本意も遂げなむと思しなる。対の上の御ありさまの見捨てがたきにも、中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親さまには、まづ思ひ聞こえ給ふべければ、さりともと思し譲りけり。夏の御方の、時々にはなやぎ給ふまじきも、宰相のものし給へばと、皆とりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

明けむ年四十になり給ふ、御賀のことを、朝廷よりはじめ奉りて、大きな世のいそぎなり。その秋、太上天皇になずらふ御位得給うて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひ給ふ。かからでも、世の御心になはぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めで、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひ給へば、内裏に参り給ふべきこと難かるべきをぞ、かつは思しける。かくても、なほ飽かず帝は思しめして、世の中をはばかりて位をえ譲り聞こえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。

(藤裏葉)

十月下旬、紅葉を御覧になるため、冷泉帝と朱雀院がそろって六条院に行幸した。光源氏が准太上天皇の位にのぼり、栄華の頂点に達したことで、高麗人の相人の予言(「桐壺」巻)が実現したことになる。